【最優秀賞】
No.18「みんなのまちの役割が変化する 『まちへん』」
たつのソーシャルインクルージョンプロジェクト
（宮崎宏興、池本和弘、福崎千晃）

受賞コメント

この度は、素晴らしい賞を賜り深く感謝申し上げます。
コロナ禍が浮き彫りにした社会課題は、決して非日常のものではなく、日常の地続きとして理解していくこと、地域コミュニティの醸成によって解決すべき本質であると捉えることができました。今後も、『まちへん』を実装するために、自治体や事業者と連携し「うまくいくコト（気づきの速度・モニタリングと対応・学び）を増やす」ための繋がりをデザインし続けたいと思います。

評価コメント

地域社会の住民が自律して日常と災害時をシームレスに繋ぐ実験的提案である。この商店街の『まちへん』が、災害時に向こう3軒両隣を超えて、隣接する『まちへん』と相互の役割を連携するには、日常のマネジメントを担う主体（人材）の育成が課題。その主体の協働の力と情報発信力が『まちへん』を育てていく。実現を期待します。（齊木）

災害時を想定してまちの機能を共有しようという提案で、大変魅力的であった。ただし、コミュニティが限定されるのではないかという疑念もあった。（佐藤）

本当の目的は通常の生活において地域コミュニティーが機能すること。審査会当日の説明にあったこの内容に感銘を受けました。滅多に起こらない災害時を想定した仕組みが、実は日常生活のあり方を再考させる点が、発想としてすばらしい。「向こう三軒両隣」といった、かつてあった生活基盤復活の可能性を感じさせ、「減災」を超えようとする提案として高く評価します。（森山）

最優秀賞の「まちへん」には、今年度の提案の中だけでなく、減災デザイン＆プランニングのこれまでの数々の提案の中でも抜きんでた新規性を感じました。既存の社会制度、システムが弱体化する中で、頻発し激甚化する災害にどう向き合うかというときに、各々の潜在的な可能性や力をいかに引き出すかが重要だと思われます。そこで、災害に関する「専門家」だけではなく、広い意味での市民が連なる「まち」が「へん」化する可能性についてのコミュニケーションを促し、その実感を醸成するこのプログラムは、これからの減災デザインの方向性について一石を投じるものだと思います。（宮本）

薬屋さんに薬があるのはあたりまえなので、普段からその店主の隠れた活動も紹介できるとさらに良いのでは。（相良）

社会課題の着眼点は良いが、結実する提案内容は、リアルな社会においての実効性には乏しい机上のゲーム感を覚える。街にあるさまざまな人の生業は、災害時にその人が得意とできる支援分野となることは明白なので、あえて災害時のために「別の」看板を用意する意味があるだろうか。ただ、災害時の（行政や自治組織と企業等との）支援協定を結ぶ方法やその見せ方として効果的なアイディアが含まれているかもしれない。また発案は、啓発イベントの仕掛けとしては活かせるのではないか？という可能性は感じた。（平林）